

扉を開けると、その先は下へと続く階段だった。

それを一気に駆け降りるとそこは薄暗く、かなり広い通路に出た。その広さは通路と呼んでいいのか迷うくらいだ。

通路の両側には鉄格子でできた牢屋が奥までずっと続いている。

ここは地下牢。

牢屋の中はさっきの異能者たちと同じように頭から布を被り、全身を覆い隠した人間がたくさん捕らえられていた。

老いも若きも。男も女も。

牢一つにつき五人から六人。その割に牢の中が広い。

一箇所固まって寄り添っているせいかな。人数に対して牢が大きすぎる。

彼らはあたしたちが駆け込んでくるのを見るや否や、怯えるように体を震わせてこちらを警戒している。

「シノちゃん。ここにいるのは……」

「間違いなく捕らえられた異能者たちだろうね」

あたしには異能者か否かの判別はできない。

けど、さっきの異能者と同じ格好をさせられているし、西のインフィニットは異能者狩りでたくさん異能者たちを捕らえていると聞く。

この現状を見ればここにいるのが捕らえられた異能者たちだと分かる。

すぐに助けてあげたいけど。今はヴィクロスを追わなければならぬ。

「ねえシノちゃん。どうしてイナちゃんを一人にしたのね？」

長い地下牢を走りながら、唐突に尋ねるメル。

そっか。さっきは何の説明もしないでメルを引っ張ってしまったんだっただ。

「さっきの異能者、イナちゃんのとーちゃんに化けたね。自分

の父親を相手にするなんて辛いはずね」

「ん〜、あたしは逆だと思うなあ。いつか言ってたんだ。イナさんの剣は父親を超えるためにあるって。だから戦いたかったんだと思うよ。一対一でね」

イナさんの口ぶりだとお父さんのことをひどく嫌っているように聞こえる。

けど、さっきのイナさんを見ているとそんな風には見えなかった。なんていうか：：あたしにはとても測りきれないや。

イナさんには複雑な家庭事情があるんだろう。あまり身の上話をしてくれないのもあるけど。

「それにさ。あたしらじゃ役不足だったんじゃない？」

「ムツ！ そんなのやってみないと分からないね！」

「ん〜そうかなあ？」

やってみないと分からない、か。そういう所はメルらしい。あたしなんて格上相手に命を懸ける度胸がないや。あれだけの戦いを見せられてしまったこともある。

以前はベゼルにも恐怖を感じていたけど、今じゃなにくそっていう対抗心の方が強いや。

もしさっきの異能者があたしの心を読み取っていたなら、きつとベゼルに姿を変えていただろう。

イナさんはイナさんの思う強敵と戦っているんだ。

あたしたちも頑張らなくっちゃ！

「見つけたね！ ヴイクロスがいるね！」

通路の先を指差すメル。

その突き当たりには大きな扉の輪郭が見える。

そこにヴイクロスの姿があった。

わずかに開いた大きな扉。そこから外に逃亡しようとしていたのだろうか？

「もう逃げられないね！」

ヴイクロスは体ごとゆっくり振り返ると、けたたましい声で怒鳴り散らした。

「フンッ！ 時間稼ぎもできないのかあの馬鹿者が！ 少しばかり使えるから置いてやったものを！ 兵たちもだ！ ゾンビになっても使えん無能！ 無能者！ 異能にも劣るわっ！」
自分以外の人間を罵るその姿にあたしは呆れてしまった。

ヴィクロスにはもう味方はいない。

あたしたち二人を相手にする戦いの技量も持ち合わせていないはずだ。

それなのにヴィクロスは今も尚、強気にあたしたちを睨み付けている。

「観念するね！ 西のインフィニットはこれでお終いね！」

「フハッ！ 世迷言を抜かしおるわ。ウフフフハハハハハ！ 面白い！ オモシロイ！ ハハハハハハッ！」

狂ったように笑いだすヴィクロスにあたしは不気味なものを感じていた。

笑いそのものも不気味ではあるけど……。何よりもこの余裕。まだ何か手札があるのだろうか。

「何がおかしいね？」

「これを笑わずにいられるか！ この私自らが戦う出番が回ってきたのだぞ！ 実に苛立たしい！ だが同時に圧倒的な力の前に打ち倒れるお前たちが見られる！ これは楽しい！ 楽しいではないか！ その力が私にあるのだあ！」

どこにそんな自信があるんだろう。

現状は二対一。体の作りからしてもヴィクロスは鍛えていない。一対一で戦ったとしても結果は目に見えている。

それなのにあの自信だ。口ぶりからこれまでも戦いというものをしてきたようだ。

なぜあそこまで大きく出ることができんだろう。

なぜこれまで戦って勝つことができたのか。異能者ではないヴィクロスなら尚更に疑問だ。

あたしは逆に違和感を覚える。

ヴィクロスのその言葉、その自信の根拠。

インフィニットを統べる者の一人である以上、こういうことはこれまでもあったはずだ。

今回のインフィニットとアンリミテッドを含む反組織の戦争を見てもそうだ。

戦力が均衡していれば、今回のように攻め入られることもあっただろう。

でも、なぜこのウエストサンド宮殿が一度も反組織に奪われることなく維持してこれたのか……。

ヴィクロスは何かを隠している。それは間違いなさそうだ。
「お前に圧倒的な力なんて無いね！ 部下も居なければお前自身も異能者じゃないね！」

「いいのぉしゃあぁ？ 異能者と言ったのかこのバカ娘が！ そんな欠陥品など何の役に立つというのだ！ よくも私をそんなものと同列に見おったなあ？！」

ヴィクロスは恨めしそうな顔でメルを睨み付けた。
異能者そのものに嫌悪感を抱いているのだろうか。

それならなぜ、ここにはこんなたくさんの異能者たちが捕らえられているんだろう？

ふと右の牢にいる捕らえられた異能者たちに目をやった。
牢の中では全員が身を寄せ合い、怯えるような目であたしを見ていた。

何かしら酷い仕打ちをされてきたのが分かる。異能者というだけで……。

「貴様ら異能者のクセに気が付かなかったのか？ この宮殿には異能者がいる。が、ただの異能者ではないということ！」
ヴィクロスの言葉を聞いてメルはあたしの方を振り返った。
あたしはメルを見て頷く。

「やつぱり。同じ能力を持つ異能者がいるんだね。あれだけの数のゾンビ兵を一人で操るなんて無理だから」

「それにイナちゃんも戦っている異能者は能力を二つ以上持っていたね。二つ以上の能力を持つ異能者なんて、これまで聞いたことが無いね」

異能者は他の異能者と同じ能力は持ち得ない。
使える異能の力は異能者一人につき一つだけ。

誰が調べたかは分からないけど、それが通説となっている。
だから、あたしのような水を操る能力は他者から見れば本当に貴重な能力なんだと思う。

それなのに、この宮殿の兵士は死者を操る能力を持つ者が大勢いた。さっきの敵の異能者もそうだ。

これは明らかにおかしいことだ。

「捕らえられている異能者の力で何かしたのね？！」

「フン！ 欠陥品に何ができる？ ここにいる異能者どもは自分以外の者へ干渉する能力を持っているから生かしてやってい

るだけだ！」

「干渉する能力：：？？」

異能者、異能の力と言われ続けてきた中で始めて耳にする言葉だった。

とんでもない数のゾンビ兵たち。

異能の力を持つインフィニットの兵士。

自分以外の者へ干渉する能力。

「――まさか？！ 人工的に異能者を作っているの？ 力を分け与えている？」

「どういうことね？」

「異能者の力を使って、インフィニットの兵士を異能者にしていくんじゃないかってことだよ。死んだ兵をゾンビ兵として蘇らせる能力を大量の兵士に使わせているってこと！」

死んだ人間をゾンビ兵とする。その能力を持つ者が何人もいれば兵力は人数以上のものになる。

それがもしそうだとしたら：：とんでもない話だ。

普通なら考えも付かないことだけど、やっぱりそれ以外に考えられない。

「そうだ！ それが干渉する能力だ！」

イナさんの相手をしている異能者は二つ以上の能力を使っていた。元ある能力に他の能力を足したんだ。

恐らく相手の思う強者へ姿を変える能力が最初からあったものだろう。それくらいの能力が無ければヴィクロスがそばに置くはずがない。

「ここにいる異能者たちにも能力を与えて手駒にしようとしていたのね！」

「与えられる能力の数には限りがある。それに異能者同士の方が干渉しやすい。元から能力を持つ異能者に能力を与えてやれば強力な異能者が生まれる！ どうだ？ 欠陥品にも使い道があるだろう？ これだけのことを思いついたのは私のみ！ 私こそが天才なのだ！」

まるで酔いしれているように語るヴィクロス。

そうか。だからこの地方の異能者は殺されずに捕らえられているんだ。

ヴィクロスはそれだけ、インフィニットの命令に背いてまで

に力を欲している。

けれど、能力を与える異能者がいるとして、これだけの数の人間に能力を与えることができるだろうか。

「欠陥品も寄せ集めれば戦力となる。忠誠心など干渉する能力でどうにでもなるのでな。私はインフィニット史上最高の軍団を作る！　そして私はインフィニットを――――」

自らの口を両手で塞ぐヴィクロス。

おかげでその目的が分かってしまった。

野望を語ることに酔いしれていたのだろう。もともとよく喋る性格も災いしている。

「なるほど。西のインフィニットの王、ヴィクロスはその軍団でインフィニットそのものに乗っ取ろうとしているわけだね。これがインフィニットの本部に知れたらまずいんじゃない？」

あたしに向かつて薄気味悪い顔で笑うヴィクロス。

「どうせお前たちは死ぬ！　関係のないことだ！」

「そうね。ウチらには関係ないね！　どうせ西のインフィニットは今日で滅ぶね！」

メルはきつぱりと言い放つとヴィクロスを指差した。

それが瘤に障るのか、ヴィクロスはメルを怒鳴りつけた。

「うつけが！　まだ分らんのか！　干渉する能力を持つ者、異能者の原種と呼ばれる者を私は手に入れたのだ！」

「原種？」

ヴィクロスはわずかに開いた扉の隙間に手を入れると、小さな男の子を引っ張り出した。

ロメリアと同じくらいの歳の頃だろうか。

男の子は不安げな面持ちでヴィクロスを見つめている。

「ヘリオ！　お前の力が必要になった。父のために力を使え！」

「ち、父い？！　子どもがいたの？！　そんな性格で？！」

「うるさいわっ！　馬鹿者めが！」

自分の子どもをこんな地下牢の奥に閉じ込めておくなんて。ヴィクロスに子どもがいることも驚きだ。

ヘリオと呼ばれる少年とヴィクロスの顔は全然似ていない。

さつき手に入れた原種というのがこの子なら、血の繋がりは無いのだろう。

彼もまた、都合のいいように利用されているんだ。

「いいなヘリオ？ 返事をしろ！ ヘリオ！」

「う、うん……」

ヘリオと呼ばれる少年はこくりと頷く。緑色の長い前髪が揺れる。

しかしヴィクロスが話していた原種という言葉とこの子がどう繋がるのかが分からない。

見た目ではあたしたちと何ら変わらない姿をしている。まあ、異能者も見ただ目じゃ普通の人と変わりないんだけどね。

「これで無敵！ 無敵だ！ ウフハハハハッ！」

こんなところに幽閉してまともな扱いを受けていないはず。

それなのになぜあの子はヴィクロスの言葉に従うんだろう。

ヘリオくんがヴィクロスに従う理由がまったく分からない。

その野望に協力したいという感じはしない……。

「どうしよう。ロメリアくらいの子に刀を向けるなんてとてもできそうにないよ」

「邪魔をするなら戦うまでね。ヴィクロスに協力するならインフィニットの人間ね！」

メルは戦うつもりだ。反組織アンリミテッドの人間として、それは当然の選択かもしれない。

でも、やっぱりあたしにはあんな小さな子を斬るなんてできそうもない。戦うならヴィクロス一人だけにしたい。

「さあやれ！ あの時のように、私に力を与えるのだ！」

ヘリオくんが小さく頷くとヴィクロスに手をかざした。

するとすぐに変化が見られた。

「き、き、キタ！ キタキター！」

ヴィクロスは体を大きく仰け反らせた。

「う、ウツ、オ……オオオウ！」

その姿が次第に変貌する。

ヴィクロスの肌が緑色に変化し、身体は服を突き破って膨れ上がっていく。

身体のいたる所から植物のツルのようなウネウネした触手が生え始める。

触手はヘリオくんに絡みつく膨れ上がるヴィクロスの身体の中へ飲み込まれていった。

その両足までもがガツチリと地面に根を下ろしてしまった。

もはやどこから見ても植物そのもの。ヴィクロスは一本の巨大な木になったようだった。

「ウハハハハハッ！ どうダ？ この身体はどこまでも大きくなるゾ！ 私は無敵ダ！！」

「き、気持ち悪いね！」

「同感。性格が形になってるみたい」

姿を変えることそのものはヘリオクンの力として、あのカタチになっただけのはヴィクロスという人間を表しているかのようだ。

植物の身体からウネウネと触手が生えてくるその姿は不快感かつ不気味だ。ネチっこい性格なんだろうなあ。

「この力がまだ分からぬカツ！ 馬鹿者めガ！」

ヴィクロスの体から伸びる無数の触手。その何本かがメルに向かつて伸びる。

どれだけの威力か分からないけど、締め上げられたりヘリオクンのように飲み込まれたりする可能性もある。

なにより、あれだけ啖呵を切った能力だ。油断はできない。

あたしは急いで刀を抜くと、メルの前に立った。

向かってくる触手に水御華を掲げる。

「ハアアア！」

水御華を振り下ろすと、容易く両断することができた。

地面に落ちた触手はウネウネとのたうつ。これはホントに気持ちが悪い。

「馬鹿めガア！」

両断した触手の断面から瞬く間に触手が生え揃う。

新たな触手はメルの上に絡みつくともメルを宙吊りにした。

「あわわっ！」

「このっ！ メルを離せ！」

触手を斬ろうと刀を振るうも、足元から別の触手が飛び出し、あたしの進行を遮る。

「取ったゾ！ アンリミテッドを束ねる一族の娘ヲ！」

「くっ！ 最初から分かっていたね！」

ヴィクロスの狙いは初めからメルだったんだ。

反組織アンリミテッドの長の血族であるメルを人質にして、この戦争を終わらせるつもりか？！

「動くナ！」

「くっ……」

「シノちゃん！　ウチに構わずヴィクロスを倒すね！」

「うるさい！」

メルが必死にもがくものの、触手はメルの足だけでなく体中にまで巻きついてしまった。

あたしは刀の刃を下に向けて床に突き刺した。

「よおーシ！　妙な動きをしたらこいつの命は無いゾ！　人質は小娘一人で十分だ。お前には死んでもらう！」

ヴィクロスの足元からあたしに向かって床が裂けて行く。

それがあたしの足元までくると裂け目から無数の触手が飛び出し、天井近くまで勢いよく伸びる。

「シノちゃん！」

天井近くまで伸びた触手は向きを変えてそのままあたしに向かって落ちてくる。

あたしは床に突き立てた水御華を掴んだ。

「ハアアアア！」

ズシューー、ブシューーツ！

床に向かって更に水御華を押し込むと、その切れ目から大量の水が噴き出す。

上から降り注ぐ触手を水圧で押し留めた。

水御華の力を信じていればこれくらいできるんだ！

「今だ！」

水御華を床から引き抜き、その刃で上空の触手を両断！

そこからメルに向かって水御華を縦に振り下ろし、水の刃を生み出した。

水の刃はメルに巻き付く触手を断つ。

「メル！　こっちに！」

自由を取り戻したメルはすぐにあたしのそばへ。

両断された触手は断面から新しい触手を生やした。

触手はさつきよりも更に数を増やしている。時間をかければ

それだけ不利だ。

「やっぱりヴィクロス本体を叩くしかないね！」

触手をいくら相手にしていてもキリがない。ヴィクロス本体

を攻撃しないと！

ヴェイクロスは一且、触手を自分の体に戻した。

そしてあたしに卑しく笑いかける。

「フツ、フフフツ！　そうカ！　お前は水を生む異能者カ！　これはいいゾ。その力は砂漠の世界において貴重ダ。何よりこの姿と相性がいい。貴様がいればこの体は無敵ダ！」

「誰がお前なんか協力するもんか！」

相性がいいと言われて鳥肌が立ってきた。

誰があんなやつなんかのために！

「お前の意志などヘリオの力を持ってすればどうにでもなることダ。意識を飛ばシ、思うままに操ってくれル！」

「そんなことさせない！　この刃と水がお前とインフイニットを断ってみせる！」

「私を断つだど？　それは無理ダナ。原種の力はこんなものではない！」

ヴェイクロスの緑の体がまたも変色する。

その体から伸びる触手や根は塵となって消滅し、今度は皮膚が岩のように角ばり、体も石のような色に変色した。

植物の体から今度は岩石に姿を変えたんだ。しかもさつきより一回りも二回りも大きくなっている。

これが干渉する能力、原種と呼ばれるヘリオくんの力。

ヴェイクロスによって取り込まれたヘリオくんは依然として姿を見せない。未だヴェイクロスの体に同化しているのだろうか。

「これで刃も水も効かないゾ。私は無敵ダ！　無限に無敵！　ククククツツ：：ハハハハハハハッ！」

「そんなの！　やってみなきゃわからないよ！」

あたしは水御華を構えてヴェイクロスに走り出した。

ヴェイクロスは動かない。ただあたしを正面に迎えている。

油断してくれているのならそれでいい。

その間に勝負をつけるだけだ！

「ハアアアア！」

地面を蹴って大きく跳ぶと、ヴェイクロスの頭上目掛けて水御華を振り下ろした。

あたしの刀がヴェイクロスの頭に触れる一歩手前でヴェイクロスのゴツゴツと角ばっていた身体がツルツルの表面に変わる。

ギギギギッ！

刃は丸い岩の皮膚を滑るだけで手応えがまったくなかった。その隙を突いてヴィクロスの拳があたしに繰り出される。なんとか刀で弾こうとするものの、滑らかな表面の拳と思っただよりも鋭い突きによって刀は弾かれてしまった。

ヴィクロスの拳があたしの顔面へと伸びる。

「シノちゃんっ！」

「くうっ！」

後ろへ飛びながら首を振ってそれを回避してみるも、こすれた右頬は皮膚を裂き、血を垂らした。

続けざまにヴィクロスの拳があたしの体へと伸びる。

刀で受けてちゃダメだ！

「水よっ！」

刀から大量の水が噴き出る。

水は飛沫を上げてヴィクロスの体へ打ち付けられた。

「無駄ダ！」

「無駄なもんか！」

水は勢いを増してあたしの体を持ち上げるとヴィクロスとの距離を離れた。

「水にはこういう使い方もあるんだ！」

「小癪ナ！ 逃げてどうなるというのダ！」

相手が岩じゃ確かに刃は通らない。

けど、あたしの技の中でも最も斬れ味の高い技。限界まで圧力を絞った水刃の太刀ならどんな物も断つことができる。

勝機はまだある！

「スウ……」

あたしは水御華を鞘に納めると、柄を握って意識を刀に集中させた。

「何のつもりか知らんガ、無駄なことダ」

柄を通して水御華に異能の力が流れていくのを感じる。

高まった水御華の力を、あたしは感じていた。

「勝つのは私ッ！ このヴィクロスⅡアインスⅡベクトリクス様ダ！」

ヴェイクロスの拳があたしに向かって伸びる。

「今だ！ その向かってくる勢いも利用させてもらおう！」

「これがあたしの奥の手だ！」

鞘から抜刀すると同時に、水御華の力を解放する。

「奥義・水刃の太刀！」

鋭い水の刃がヴェイクロスに向かって走る。

水はヴェイクロスの岩の皮膚に食い込むと、激しい飛沫を上げて突き進む。

「――ウツ、ウ、：：ウガアアアア！」

ここで初めてヴェイクロスが苦しみだした。

石の身体といっても自由に動かせる以上はヴェイクロスの身体だ。斬り裂かれれば痛みもするのかもしれない。

「うワア！ ワツ、ワアアア！」

ヴェイクロスの悲鳴も激しい水の音にかき消されていた。

「斬り裂けええええ！」

水の刃は勢いを増してヴェイクロスに襲い掛かる。

より大きな水しぶきが辺りに振り撒かれる。

――これがダメなら：：もう、打つ手がない！

これでもかというくらい水御華を握り締め、あたしの力を注ぎ込んだ。

水の刃がわずかに前進する。

それと同時にパァンツ！ という大きな音を響かせて水が大きく弾けた。

その場にガクンツと膝を付くヴェイクロス。

「ハア、ハア：：ハアアアア！ ハアアアアア！」

ヴェイクロスは大きく息を吐いた後、再び立ち上がる。

「フンツ！ 脅かしおっテ！ この罪は重いゾ！」

その身体には左肩から斜めに傷が付いたただけだった。

水はヴェイクロスを砕いたんじゃない。その強度に成す術無く弾かれてしまったんだ。

「そんな：：！」

「やはり欠陥品の力などその程度のものダ。この原種の力の前ではナツ！ フハハハハハッ！」

嘲笑うヴェイクロス。己の力に酔いしれている。

その力は自分の生み出したものじゃないのに：：：。

ヴェイクロスの岩と化した体は頑丈なんてものじゃない。
しかも丸くツルツルな形状の前にはどんな攻撃も通じ難い。
あたしの剣も、水御華の水も通じないんだ。
ここにイナさんが居てくれたら……。

「まだ終わっていないね！」

ヴェイクロスの前に立ちはだかったのはメルだった。

「メル！」

「ウチは諦めてないね！」

「無駄だと分からぬ愚か者めガ！」

「無駄なんかじゃないね！ 今日まで戦ってきたアンリミテツドのみんなのためにも……ここに囚われた異能者たちのためにも……ウチは絶対に負けられないね！」

メルが露にしたのは、剥き出しの闘争心と決して挫けることのない心。

これまでメルやアンリミテツドの人たちはそうやって頑張ってきたんだ。

メルはその闘志にあたしの心もくすぶられるみたいだった。

これがアンリミテツドを継ぐ者の言葉。

多くの人たちを導いてきた一族の持つ素質。

それをメルもしっかり受け継いでいるんだ。

「貴様も所詮、ただの異能者。私の敵では無イ！」

「やってみなきゃ分からないね！」

ヴェイクロスとの間合いを一気に詰めるメル。

それを岩石と化した拳で迎え撃とうとするヴェイクロス。

メルは紙一重でその拳を搔い潜り、カウンターでヴェイクロスの

胸板に蹴りを浴びせた。

堅い岩の皮膚に反動がそのまま返ってきているのか。メルは

逆に大きく弾き返されてしまった。

戦い慣れをしていないヴェイクロス自身は大して反応ができていないというのに。岩の体そのものがヴェイクロスを守る壁の役割をしているかのようだ。

しかしメルもまだ諦めていない。

巨大化したヴェイクロスには自らの体にある死角も多いようだ。

メルはその死角となる箇所へ速度を高めて動き続ける。

でも、いくら死角を突いても攻撃の手段がないんじゃないか。決め手に欠けてしまう。メルはどうするつもりなんだろうか。

「どこへ行っタ?!」

「ここね!」

ヴィクロスの背後から肩越しにメルの顔が見えた。

「どんな硬い肉体にも関節があるね! 体を動かすための関節がお前の弱点ね!」

「そっか! その手があつたんだ!」

メルはヴィクロスの首に両腕を巻きつけ、右肩の方に両足を絡めて力いっぱい引っ張った。

普通の人間ならこれで動きを封じられる。

が、ヴィクロスは顔に苦しみの色は無い。まるで関節というものがないかのようなようだ。

でも、それじゃあどうやって動いているのか説明が付かない。力の限り締め付けるメルに対し、やはりヴィクロスに変化は見られない。

「こんなこと、ありえないね!」

「貴様が私の体に触れた瞬間から体の質量を変えただけのことだ。重さはおよそ三百キロ。その細い腕で動かせるかナ?」

「ずるいね! そんなの!」

「さえずるナ! それが原種の力というものダ!」

ヴィクロスは背中の手をやりメルの体を捕まえると乱暴に振り回し、あたしに向かって投げつけてきた。

避けたらメルの身が危ない!

「うああああ!」

「メル!」

体を張って飛んでくるメルを受け止めるものの、勢いそのままにあたしとメルは一緒に吹っ飛び、牢の鉄格子に体を打ち付けられてしまった。

その衝撃から、かなり強い力で投げられていたと分かる。

鉄格子に打ち付けられた背中がじんじんと痛む。

「あぐう!」

メルは苦痛に顔を歪めていた。

その手で押さえている所を見ると、捕まれた所に痛々しいア

ザができていた。

ヴィクロスが容赦なくメルの体を握り締めた跡だ。

「女の子相手に。なんて酷い！」

「死体になれば同じことダ！」

「くっそお！」

刃も水も効かなければ体術も効かない。

こんな時にイナさんがいてくれたら……と、何度思ったか分

からない。

けど、イナさんが来る気配が無い。向かって来てくれるなら

地下に足音が響くはずだ。

きつと今も敵の異能者と戦っているんだ。それだけ強い相手

だったんだ。

敵の異能者も駆けつけて来ないということとは負けてはいない

ってことだけど……いや、イナさんに負けはないはず。それは

信じられる。

ただ、今は頼みにしちやダメだったことだ。

でも、あたしにはもはや打つ手が無い。

このままじゃあたしやメルがやられてしまう。

外の戦いにヴィクロスが参加したらそれだけで形勢が変わっ

てしまう。

——どうする？ どうしたらいい？ あたしにできることつ

て何があるの……？

ひたすら焦る中、何か他に方法はないかと探っていると、水

御華を持つ右腕が震えた。

……リイン。

まただ。水御華から音が聞こえる。

あたしの中に入り込んで意のままに刀を振るいたがっているんだ。

イチかバチか、この場を水御華に委ねてしまうか？

あたしじゃどうすることもできないピンチでも、水御華なら

なんとかできるかもしれない。

何よりも水御華の方が自身である刀の扱いに慣れているし、

水の能力もあたしより上手のはず。

——どうする？　あたしの意志で、あたしを意思を手放してしまってもいいのだろうか。

その時、あたしはちゃんと帰ってこられるだろうか……。
「フン。もう戦わないのか？　さっきの威勢はどうした？　これでは足りん！　足りなさ過ぎる！　貴様ら欠陥品はつくづく価値がないナ！　せつかくこの身体になったのだ。もっと楽しませろ！」

「ぐうう……。ウチらは、欠陥品じゃ、ないね！」
痛みを耐えながら訴えるメル。

異能者であることが差別の対象だったのに、欠陥品とまで言われて黙っていられないんだ。

「人間は既に完成された生き物だ。異能などという余分なモノは淘汰されていけばいいのだ！　貴様らがいなければ原種も見つけやすいものだろう？」

ヴィクロスは異能者の原種と呼ばれる存在を探すために異能者たちをさらってここに閉じ込めていたのか。

ヘリオくんを手に入れたのはその前なのか後なのか分からなけれど、どれだけ多くの人がヴィクロスの野望のために犠牲になったか分からない。

異能者と呼ばれる人たちはただ普通に暮らしたかっただけなはずなのに。

「そうダ。ヘリオを手に入れた今、原種が紛れているかもしれないト、淡い期待だけで異能者どもを生かす必要はないのだ！　殺してしまおう！　異能者狩り、再びダ！」

「勝手なことばかり言って……。お前は人でなしね！」
「フンッ！　負け犬の遠吠えなど届かぬワ！」

あたしが生まれた街では異能者の差別は無かった。
そういう目で見える人がいなかったわけじゃない。

分け隔てなく接してくれる人たちがばかりで、あたしはそんな周囲の人たちも大好きだった。

でも、それを奪ったのはインフィニットの異能者狩りだった。
インフィニットの作った異能者狩りという言葉を発端に、普通の人たちは異能者を遠ざけるようになった。

異能者はどこまで逃げてでも追われ、殺される。
そして父さんと母さんも異能者だったから殺されてしまった。

ヴィクロスのように異能者を切り捨ててもいいと思う人たちによつて……。

「そっか、そういうことだったんだ……」

「シノちゃん……？」

どうやって異能者を見つけているのかずっと疑問だったけどようやく分かった。

それは身の回りの人たちが異能者を自分たちとは違う生き物と見て、裏切っていたんだ。インフィニットや暗殺ギルドに情報を売ったり、密告をしたりして。

異能者狩りは随分前に無くなり、一部の者たちだけで行われている。

それが西のインフィニットの鶴の一声によつて再び行われたら……また多くの異能者が命を落とすことになるんだ。

そんなこと、絶対許されることじゃない！

「あたしたち異能者だって人間なんだ。インフィニットの……お前の考えは間違っているんだ！」

「だったらどうすル？ 貴様には私を止める力などない！ 何もできズ、無念のままここで殺されるだけダ！」

「くっ……それでも！」

再び水御華を構える。

勝てる見込みなんて無いけど、あたしはこの男が許せない。

そんなあたしに対し、ヴィクロスは何もしない。

見下し、嘲笑うだけ。

もはや敵ではないという認識でしかないんだ。

リイイイイイン……。

そんな態度もあたしの癪に障る。

ふっふつと怒りが込み上げてくる。

「笑うなっ！ お前なんか！」

両親を殺させたインフィニットが憎い。

欲望のために異能者を虐げてきたヴィクロスが許せない。

水御華から聴こえる音と共に、怒りや憎しみがあたしの内側を駆け巡っていく。

怒りや憎しみ。そんな感情もいつからか忘れていた。

まるで水御華の音がそれをかき立てているみたいだ。

リン……リン……。

あたしの両親は異能者というだけで殺された。

それも、あたしの目の前でだ。

その時あたしは怒りのままに水御華を握った。

それからどうなったか覚えていないけど、どれだけ憎くかつ

たか、今なら思い出せる。

心の奥底でざわめく怒りと憎しみ。

なぜ今まで沸いてこなかったのか不思議なくらい、今のあたしを染めていた。

リイイイイイイイイン。

——いいよ水御華。あたしの体をあげる。好きなようにしていいからね。だって許せないんだもん。インフィニットのこと。異能者狩りをする人間がさ……。

「怖気づきおつて！ 来ないならこちらから行くゾ！」

ヴィクロスを見る。

さっきまで敵わない相手だなんて思っていたのが嘘のよう。

だって、あたしが負けるはずないもの。

「なんだその目ハ！ 気に入らん！ 貴様が勝てるはず——」

ゴイン！

「なッ？！ 何んだ？！」

どうってことはない。ヴィクロスの後頭部に刀を打ち込んだだけだ。その巨体じゃ反応もできないだろうけど。

振り返るヴィクロスは脇を潜って再び後ろを取る。

それを追いかけるように再度振り返るヴィクロス。

「無駄だと分からぬ愚か者ガ！」

ヴィクロスは右手が丸く形を変え、更に大きさを増す。

鉄球のような右手を持ち上げ、上から叩きつけるように振り下ろしてきた。

「死ネエ！」

ドオオオオオオオン！

盛大な音と共に床へ打ち付けられるヴイクロスの腕。

床はそこを中心に大きな穴を空け、床の亀裂は左右の牢屋にまで届いていた。

「驚いた。この宮殿を壊すつもりなんだ？」

「何だトオ？！」

「そんなの、当たるわけないよ」

あたしはヴイクロスの腕を足場にして飛ぶとヴイクロスの頭に向かつて刀を振り下ろした。

硬い岩の皮膚が高い音を立てて刀を拒む。

それでも構わない。あたしは好きなように刀を振り下ろすだけだ。この怒りが収まるまで。

「馬鹿メエ！ まだ分からぬカ！」

嘲笑うヴイクロスの顔面に刃を入れるとその鼻がパキンッと音を立てて捻げる。

「又オ！ 馬鹿ナアアア！」

左手で鼻を押さえるヴイクロス。

きつと初めてのことなんだろう。

あたしは構わず刀を振り続けた。

「ハアアアアアアア！」

気合と共に無数の斬撃をヴイクロスの顔へ打ち込んでいく。

ザクザクザクザクッ！

ヴイクロスの顔からポロポロと岩の皮膚が欠けて落ちる。

「どっ、どうなっているのダ？！」

おしゃべりな口をしているんだ。動く分、表情の強度は体ほどじゃないんだろう。

それにさっきまでのあたしじゃない。

岩を断つことも腕前次第。今なら何でも斬れる気分だよ。

インフィニットもヴイクロスも、みんな斬られちゃえ！

「止め口！ 止める止める止め口口口口オ！」

「へえ止めて欲しいんだ？ 自慢の身体なのにね」

でも、あまり打ち込んで刀の方も心配だ。

ヴィクロスから一旦離れる。

刀を根元から先まで眺めるも、特に破損はなかった。

「ぐぬぬぬヌ！ ありえヌ！ こ、こんなことガ！」

ヴィクロスは痛み顔を押さえていた。

やっぱり痛いんだ。戦いにおいて痛みなんて当然のことなのにね。

ふとメルの方へ視線をやると、怯えたようにあたしを見ていた。あの目は見に覚えがある。

「シノちゃん？」

「ん。なあに？」

怯えるメルにあたしは満面の笑みで応えた。

不安な眼差しのままあたしを見るメル。

「ウチが分かるね？」

「メルセレスⅡシュトラゼ。その質問も二度目だね」

「よかったあ。いつものシノちゃんね」

あたしの言葉にホッとした顔を見せてくれた。

——ごめんねメル。残念だけど、いつものあたしとは言い切れないや。

メルのごときは覚えているし、あたしの意味もしっかりある。

でも、どこか動かされているみたいなんだ。

普段ならこんなに動けないし、こんなに刀を上手く使えないもん。

それに、ヴィクロスを見てみるとイライラが止まらないんだ。インフィニットが憎くて仕方ない。

心がおぼつかないのに、水御華とはこれまで以上に同調できている気がする。それが不思議だ。

リイン……。

刀から心地良い音色が聴こえる。

まるで水御華と一体になっているみたいだ。

前みたいにあたしの体を奪おうとはしない。その理由は分からないけど。

でも、今は水御華と同じ気持ちなんだと分かる。

目の前の敵を倒したい。インフィニットが許せない。憎い。

腹立たしい。そして自分の力を使いたくてたまらない。

そんな感情がどんどん湧いてくる。

利害が一致しているから、力を貸してくれるのかな？

だったら、存分に戦わなくっちゃね。

だってそうでしょ？　こんなに斬り刻んでも倒れない相手なんてそうそういないんだから。

「な、なにを笑う？　勝った気でいるのか？　異能者の分

際でエ！　許さん！　許さん許さん！」

ヴイクロスを見ると元のものよりも高く整った鼻が再生していた。

見栄っ張りめ。これは逆に斬りがいがあるぞ。

刀を鞘に納めて柄を握った。

いつものような力の流れは感じない。これで水が出るのかと思ってしまうくらいに。

でも大丈夫。あたしたちは今、一つなんだから。

「私は原種の力を手に入れタ！　もはや我が敵と成り得る者など存在せんのダ！」

「力を手に入れた？　おかしなことを言うんだね。お前なんかヘリオくんがいなきや何もできないじゃないか」

その程度の力で敵と成り得る者がいないなんて、笑わせてくれるよ。ただ堅いだけじゃないか。

「ぬあアアア！　ほざくナアア！　欠陥品の分際デエエ！」

ヴイクロスは顔を真っ赤にしながら身体を震わせて怒りを露にした。岩の皮膚でも顔は赤くなるんだな。

「あたしに言わせればお前の方が欠陥品だよ。そんな姿にならなきや強くなれないんだからね。その姿でいられるのも自分の力じゃないんでしょ。お前の力なんてゼロに等しいじゃない」

「だっ、だっ、黙れ黙れ黙れ黙れエエエエ！　許さなあああイ！　貴様はこの私に殺されるべきなのだアアア！」

肥大化した右腕を更に肥大化させて振り上げるヴイクロス。それでも変わらぬ動きを見せるのはさすがだけど、やっぱり

それはヴイクロスの力じゃないんだよね。

腕の先の鉄球がどんどん膨れ上がっていく。

「許さないのはこっちだ！　西のインフイニットは今日で滅ぶ。あたしが潰す！」

水圧で宙に浮くヴィクロスに成す術は無い。

「こ、こんナツ！　こんな事があるカ！　私の体ガ、どんな刃も通さない岩の体ガ！！」

「水御華はただの刀じゃない。お前が蔑んだ異能者の父さんが生涯を懸けて作り出した刀なんだ！」

「まだダ！　更に硬い素材へ——」

ヴィクロスは皮膚の色が変化する。まるで宝石のように透き通った材質に。

けど、そんなものは関係ない。いくらカタチを変えても同じことだ！

「水は——岩をも穿つ！」

ヴィクロスは岩の身体、その隙間の至る所から水が噴き出し始める。

内側から外へ水が出ようとしているんだ。

ヴィクロスは身体の至る所に亀裂が生まれはじめる。

「み、水ッ！　水ダ！　ワハハハッ！　この力も私の物ダ！」

ヴィクロスは錯乱しているのか。

自分に振り掛かる水の飛沫を舐めるように舌ですくって飲みはじめた。

「水御華……」

リイイイイイイイイイン！

「——これで、終わりだ！」

力を振り絞り、ありつたけの水を放出する。

水はとうとう背中を貫通し、ヴィクロスは体を突き破った。

ヴィクロスは巨体は破裂するように砕け、大きな音を立てて

後ろへ倒れこむ。

「ゴガッ。うぶっ！」

水に濡れきったヴィクロスは透き通るような宝石から元の岩の色へ戻っていった。

貫通した身体には思ったよりも大きな穴が開いていた。最後

に放った水が岩を浸食したかのように。

「シノちゃん！　まだ終わってないね！」

分かっている。ここでトドメを刺さないとまた体を再生させ

て姿を変えてくるに違いない。

もうかなりの力を使ってしまった。二度目は無い。

「西のインフィニットの最後だ！」

刀を振り上げてヴィクロスの喉元に向かって振り下ろす。

「ま、まだダァ！」

ヴィクロスの身体の中心から左腕の先に向かって筋肉がうねる。

その左の手のひらに、ヘリオクンの顔が浮かび上がった。

「くっ！」

振り下ろす刀をなんとか押し留まることができた。

しかし、あたしの中にある水御華が『斬れ』という衝動を掻き立ててくる。

ヴィクロスの間。インフィニットの人間。敵。憎い。斬りたい。そんな言葉があたしの中で駆け巡る。

「おねえ……ちゃん」

ヴィクロスの手左手に浮かぶヘリオクンの顔が辛そうにあたしを見つめている。

助けて欲しいという思いが伝わってくる。

それなのに水御華はあたしに刀を振らせようとする。

あれはあたしの敵だと訴える。斬らなければならぬと思考を操作する。

「シノちゃん！　ここしかないね！　インフィニットを倒すのは、ヴィクロスを倒すチャンスはここしかね！」

分かっていて。ヴィクロスに力を与えているのがヘリオクンの持つ原種と呼ばれる力だということ。

ヴィクロスはヘリオクンを盾にしながら自らの弱点を晒しているに等しいんだ。

メルもヘリオクンを斬ることを望んでいる。

ここにいる者すべてがそれを望んでいるんだ。

「でも……あたし、は——」

右腕があたしの意味に反して刀を上げた。

業を煮やした水御華がここにきてあたしの身体を乗っ取ろうとしているのかもしれない。

「フウ……フウ……さ、せ、ない、よっ！」

それを左手で抑えるものの、右腕はあたしのものじゃない力

によつて、いつ振り下ろされてもおかしくない状態にある。
——水御華。どうしてキミはそんなに斬りたがるの……？

リイイイイイイイイイイイイイン！

水御華の音が激しくあたしの中で鳴り響く。さっきまでの心地良さは皆無だ。

——ダメだよ水御華。この子は敵じゃない！

その思考さえも保っていられる自信が無いくらいだ。

「おねえちゃん……」

怯えるヘリオくんの顔だけがあたしの正気を保たせていた。

こんな子を斬るなんて、したくない！

「だい、じょうぶ、だから。怖がらなくて、いいから、ね」

「おねえちゃん……」

この状況にヴェイクロスが笑った。

「フハッ！ この身体が戻ったら粉々にしてやる！」

「もう……やめてよ！」

ヘリオくんはヴェイクロスに向かって叫んだ。

しかしヴェイクロスは鼻で笑ってそれを拒む。

「フンッ！ 原種の本力を見出し、生かしてやった恩を忘れたカ！ お前こそ、私という人間がいなければ何もできなかったくせニ！ こやつらを殺せば元通りの生活ダ！ 私は権力を掌握し続け、お前はここで静かに暮らすのダ！」

「でも……ぼく……」

ヴェイクロスの言葉に何も反論できなくなるヘリオくん。

そうやってヘリオくんの気の弱さに付け込んできたんだ。

ヘリオくんの意思はどこにもない。

まだこんな小さな子だもん。何が正しいのかなんて自分で言い切ることなんてできるはずないよ。

「大丈夫だよ、ヘリオくん。君はあたしが助ける。こんなやつ
の言うことなんか聞かなくなつたつていいんだよ。どうしていいか
分からないなら、一緒に考えてあげるから」

「おねえちゃん……」

「何をほざくカ！ 私はヘリオの父親だゾ！ 子は親の言うとおりにしていればいいのダ！」

「親がこんなことするもんか！ 力におぼれて、それを利用しようとして——」

あたしの脳裏に父さんの姿が浮かんだ。

——あれ？ なんだろう？？？

あたしの父さんは優しかった。けれど、今頭の中に浮かんだ父さんはどこか違っていた。

浮かんだのはあたしに剣術を教える父さん。

：：なぜだろう、あたしはどこか怯えている。好きで始めた剣術だったはずなのに：：。

「シノちゃん！ 急ぐね！」

メルの言葉で我に返る。

そうだ、今はそんなこと考えている場合じゃないんだ。

「おねえちゃん：：」

不安な面持ちのままへリオくんが口を開く。

「ぼくを、斬って！」

「へリオ？！ 裏切るつもりかアア！」

「もう：：嫌なんだ。ぼくの力のせいで誰かが死ぬのも、それを見ないふりをして生きていくのも：：。だからおねえちゃん、ぼくを斬って！ もう終わらせたいんだ！」

「へリオくん：：」

メルもへリオくんも、そして水御華も。へリオくんの犠牲と共にヴィクロスを討つことを望んでいる

リン：：。

水御華から音が聞こえなくなった。

それと同時に右腕の自由が戻る。

優柔不断なあたしに愛想を尽かされたのかもしれない。

けど、水御華の意思から離れても、あたしは選ばなくてはならないんだ。

「：：ごめんね：：」

刀を強く握り締めてあたしはへリオくんに謝った。

そしてそのまま刀を下ろし、鞘に納めた。

「シノちゃん！」

「あたしは：：斬らない。インフィニットのためでも、アンリ

ミテッドのためでもない。ヘリオくんの命は……ヘリオくんのものだから。終わらせていい命なんてない。そんなの、異能者狩りをするインフィニットと変わらないから」

水御華と同調しなくなったせいか。あたしの中にはもう怒りも憎しみも無くなっていた。

それが何を意味するのか分からないけど。

あたしはあたしだ。今のあたしが選んだことを信じるだけ。

「フツ、フフフフフ……」

石の擦れる音を立てて、ヴィクロスが上体を起こした。

「このようなことになるよハ……まさに切り札だ。さすがは我が息子ヨ。フハハハハ！」

「何一つ、お前の力なんかじゃ無いよ！」

「フンッ！ 敵に情けをかけるお前が愚かなのだ！」

ヴィクロスがゆっくりと立ち上がると、その貫通した体の穴を再生させていった。

穴を塞ぎ、元の体に戻ったとき、ヴィクロスはあたしたちを殺すだろう。

あたしに抗う術なんて、何一つ残っていない。これでもう、本当に打つ手が無いや。

——でも、後悔なんて何も無い。

ヘリオくんは斬らない。あたしはそう選ぶことができた。

そのことだけは間違いないと信じられるから……。

「確かに愚かかもしれない。だが、それが何だというのじゃ？」

あたしたちに向かって言葉が投げかけられる。

「何者だ?!」

声の方を振り返るとそこにはイナさんがいた。

あたしのすぐそばに。いろんな所に斬り傷を負いながら、ロボロの格好で。

「イナさん！」

「フツ。それでも私はシノの選択は正しいと思う。悩みだしたら止まらぬウジウジ娘じゃが」

「イ、イナさん……」

ホントのこととはいえ、ひどい言われようだ。

「だが、それがいい。それでこそシノⅡカズヒ。砂漠のアメフラシじゃ。悩んで悩んで悩み抜いた末に選んだことなら、きつと正しいはず。私はそれを信じるのみじゃ」

ニツと私に笑ってみせるイナさん。
あまりの嬉しさに跳び付きたくなってしまう。

けど、今はそんな場合じゃないんだ。

イナさんも五体満足とはいえ今の今まで戦っていたんだ。

いつものように動けるとも限らない。それほどまでに強かったんだ。イナさんのお父さんの幻影は。

「イナさん……」

「うむ？」

「……いえ、なんでもないです」

ついついイナさんの体を心配する言葉が出そうになる。

でも、それは言っただけじゃないことだ。イナさんなら大丈夫だと信じるだけだ。

それより今はヴィクロスをなんとかしないと！

イナさんの登場にヴィクロスはただあざ笑っていた。自分の力と勝ちを確信しているんだ。

「今更お前が来てもどうにもならんぞ！ 剣は効かん。その娘も力を使い果たしたと見える。私の勝ちだ！」

確かにあたしの力はほとんど残されていない。水御華の意思もまるで感じられない……。

でも、イナさんを前にしたら負ける気がまったくなくなっていった。

「フツッ。聞いたかシノ？ 剣は効かぬらしいぞ？」

「イナさん……こんな時に喜ばないで下さいよお！」

さっきまでそれで散々苦労していたというのにこの人は。

……でも、イナさんらしいや。それだけでホッとす。

「別に喜んでおるわけではないぞ？ 確かに剣が効かぬとあれば心も躍るじやろうが……コレではもう」

「こ、コレって……」

イナさんにとってはヘリオくんを取り込んだヴィクロスですからコレ扱いなのか。

「貴様ア！ 原種の力を！ 私の力を愚弄するか！」

「愚弄すると言われてものう」

イナさんは小さくため息を吐くと、面倒そうな顔でヴィクロスを見た。

「まだ気付かぬのか？」

「ナ、何をダ?!」

「おぬし。もう斬られておるぞ？」

「ナヌ？」

ぼきんっ!

ヴィクロスは左肩の付け根。そこから小気味いい音と共に左肩が身体から離れた。

ヴィクロスは肩は床に落ちると脆くも砕け散った。

そのバラバラになった腕の中からヘリオくんが出てきた。

「う……ん……」

よかった。ヘリオくんは無事だ。

でも。いつの間に斬ったんだろう？

あたしはずっとヴィクロスを正面にしていたのに。イナさんどころか斬巖刀の影すら見えなかった。

強い相手と戦っていたからだろうか。今のイナさんは全てにおいて冴えわたっているんだ。

「ヒッ、ヒイイイツ!」

ヘリオくんを失い、徐々に崩壊するヴィクロスは体。

それはそうだ。ヘリオくんが居たからこそ、その能力を使うことができていたんだから。

ヘリオくんを切り離されたヴィクロスはただの人間でしかないんだ。

ヴィクロスは体の中心。さっきあたしが水御華の水で空けた穴からも崩壊が始まる。

「へ、ヘリオ! た、助けてくれ! 父ヲ! 父を助けろ!」
必死に残りの腕を伸ばすも、ヘリオくんは目を伏せてそれを拒んだ。

「体ガ……崩レ、ル……私、ノからダダダ……」

原種は能力を無くし、自分の力では体を支えることもできず、ヴィクロスはその場に崩れ落ちた。

倒れた衝撃で上半身と下半身が分裂する。

力を無くした岩の体は脆いものだった。

「終わった……ね？」

警戒しながらヴィクロスを見下ろすメル。

ヴィクロスは完全に事切れていた。

「うん。終わったよ」

「やったね！ アンリミテッドの勝利ね！」

メルは嬉しそうにあたしに駆け寄ると抱きついてきた。

あたしもメルの体を抱き寄せ、ホッと一息ついた。

「さてと。誰か私の左肩をはめてくれぬか？ さっきの戦いで外れてしまったのう」

苦いようなバツが悪いような顔でそんなことを言うイナさん。それじゃあヴィクロスあの硬い岩の体を片手で両断したことになる。

あたしやメルがあれだけ苦労していたのに……。とんでもない話だ。

「ウチがやるね！」

「うむ。頼むぞ」

メルのそばで屈むイナさん。

遠慮も無くその肩を掴むと慣れた手つきで肩をはめた。

「どうね？」

「うむ。さすがはメルじゃな。逆に肩凝りも治った気がするぞ」
イナさんの言葉に自然と目がイナさんの胸にいつてしまう。

そりゃあそれだけのものを持つてたらねえ……いいなあ。

「イナさんの左肩が外れるなんて……それだけ強い相手だったってことですね」

イナさんが戦っていたのはイナさんのお父さんの幻影。

やっぱり戦いづらかったりしたんだろうか。

「そうじゃのう。父上のことは既に超えておったつもおったが……全盛期の頃の父上と手合わせすることは不可能じゃからのう。いい経験をしたぞ」

誰しも自分と自分の親の全盛期を重ねることはできない。

それが叶ったのも異能の力あってこそ、か。

「でもイナちゃんは今イナちゃんのとーちゃんを倒したね？ ならイナちゃんはどう超えていることになるね？」

「さあ、それはどうかのう。あくまで私の心の中の父上であつ

たのじやろう？ 本物もあの實力だったとは到底思えぬ。私も
まだまだ修行が足りぬということじやな」

「ええ！ まだ強くなるんですか？」

「当然じや。我が剣はまだ極まる所を知らぬはずじや！ 次は
一太刀のみで父上を倒してみせるぞ！」

今でも途方の無い強さだと思うのに。これより強いイナさん
なんて本当の化け物なんじやないかと思ってしまう。

イナさんをずっと目標にしていたけど……ちっとも追いつけ
る気がしないや。

「さて。ヴィクロスは倒したのじや。このことを外の者たちに
も知らせて、この戦争を終わらせるぞ」

「そうですね。一刻も早く——」
イナさんと共に歩き出そうとした直後——

「シノちゃんっ！！」

あたしを呼ぶメルの声がした。

それを耳にした時、あたしの背中に重いものが当たったよう
な衝撃が走った。

あたしの体は大きく突き飛ばされ、地面を激しく転がった。
「いたたた……」

地面を転がる中で、それがメルの当て身によるものだとは垣間
見た。

——なぜ、メルがこんなことを？

そう思ったのも束の間だった。

メルの体から五つの触手が皮膚を破って飛び出してきた。